

観光交流センターに

1億5千万円

3月定例会で成立した20年度予算。町長と議員の考え方が対立し、議論が一番集中したのが、「観光交流センター」建設のあり方でした。

「難産の子は良く育つ」の言葉に期待しながら、計画と議論の概要をお知らせします。

恵みの里への 取り組み

合併時に、新町建設計画（まちづくりプラン）のシンボル施策として掲げた「大山恵の里構想」による施策が着実に進められています。

平成19年度は、「大山恵みの里公社」が設立され、現在、特産品の開発・ブランド化など様々な取り組みが進められています。平成20年度は「大山恵

みの里計画」に沿って、豊富な資源を活かし、四季を通じて魅力ある観光

産業の創造を図るための、「観光交流センター」建設が予算化されました。

その予算額は、用地費を含め1億5千万円。財源は、国の補助金が6千万円、合併特例債（借金だが、返済金の約7割が国から交付される）が8千500万円。山陰道名和ICそばの国交省駐車場に隣接して建設され、

完成後の管理運営は大山恵みの里公社が行います。



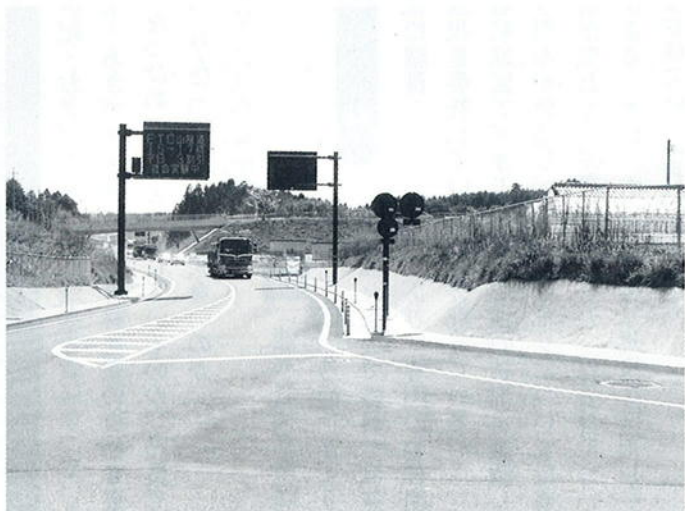
白熱した議論

当初、大山恵みの里計画では、先月開通した名和IC付近に、「観光・物産・情報の総合的な拠点」を整備することが計画されていました。

しかし、昨春秋に山口町長が提案してきた案は、情報発信に重点を置いた内容で、「観光・物産の拠点は、経営リスクが高い割りに、地元生産者にメ

リットが少ない（町外産品の販売が主になる）との理由から、「道の駅」的な町内産品の販売拠点を期待した一部の議員にとっては満足しがたいものでした。

建設地は、ICそばという好立地とはいえ、10年後に、山陰道名和・中山間が開通すれば、センター利用者が激減するところが見込まれ、町長案は、それを見越して、過剰投資にならないこと、近年



観光交流センター建設予定地